

欧州馬術レポート

週刊 Gallop 2021年12月号掲載



日本中央競馬会所属

◆佐々紫苑

(さっさ・しおん)

1995年東京都生まれ。早稲田大学卒。2012年全日本ジュニアライダー総合馬術選手権優勝。15、16年全日本ヤングライダー総合馬術選手権連覇。20年4月にJRA日本中央競馬会入会。17年より日本馬術連盟アンバサダーライダー。

馬心伝心 —奮闘記part II—

佐々紫苑

Shion Sassa



馬術の世界選手権には馬車競技もありますが、今回はお客さまを乗せる馬車のお話です。重さが800kgほどある車を引く馬車専用の馬たちは、フリージアンやペルシュロン、シャイアーなど、騎乗用というよりは主に「引く」ことを目的に改良された品種です。体形は大きく、ずんぐりとした胸筋に太い四肢、でも性格はおっとりした馬が多いことが特徴です。

日本ではなかなか目にすることはありませんが、東京競馬場にはポーランドから輸入された本格的な2頭立ての黒塗りの馬車と、それを引くオランダからきたアラヴォ・フリージアン、牝馬のサニーと騾馬のビーウルクがいます。2頭ともきれいな青毛（真っ黒）の馬で、ときたま走りながらビーウルクがサニーにちょっかいを出してくることもあります。2頭の息はぴったりです。

オランダから来たカンクンという芦毛の馬もいるのですが、初めは日本の環境に慣れず、常に緊張してしまっていました。しかしオランダで馬車に関する知識とトレーニングを積んだJRAの職員が根気よく馬と向き合い信頼関係を築いた結果、今では馬車初心者でも手綱をさばけるほど穏やかな馬になりました。地面にご褒美のペレットを置くと、まるで掃除機のように器用に唇でズボォーッと吸い上げるカンクンは、現在東京から京都にお引っ越しをし、これからまた多くの人を馬車に乗せる予定です。コロナが明けたらぜひ、馬車たちにも会いに来てくださいね。



⑤人を乗せて調教中⑥御者もシルクハットで正装します (写真はともに本人提供)



Let's enjoy Dressage

高田茉莉亜

Maria Takada



アイリッシュアラン乗馬学校所属

◆高田茉莉亜

(たかだ・まりあ)

1994年東京都生まれ。慶應義塾大学卒。2010、11年に全日本ジュニアライダー馬場馬術選手権連覇。16年の全日本ヤングライダー馬場馬術選手権で史上初の4連覇を達成した。17年より日本馬術連盟アンバサダーライダー。

約9000km離れたドイツから、愛馬ブリタニア（写真）が無事に日本に到着しました。飛行機輸送の約2週間前から隔離厩舎へ移り、血液検査や予防接種などを済ませて、いざ空港へ！持ち物は馬のパスポートと、前回のコラムでご紹介した馬のスツケースである「鞍箱」。馬輸送専用のコンテナに入り、貨物便に搭乗します。ブリタニアにとってはじめての空の旅で、道中付き添うこともできず心配していましたが、何事もなく到着してくれてまずはひと安心。

到着後は、約10日間空港付近の検疫厩舎に滞在し、改めて血液検査などを行い、私たちの日本の拠点となる厩舎へ移動することになっています。検疫上の理由で、3カ月は厩舎の移動が禁止されているので、日本での大会デビューは春ごろになりそうです。ゆっくりと日本の環境や気候に慣れてもらって、無事に大会を迎えることができるよう、コツコツとトレーニングを頑張ります！

ちなみに私は、ブリタニアから2日遅れて日本に到着し、コロナウイルスの水際対策のため政府指定施設にて6日間の強制隔離中。人馬ともに無事に検疫を終えることができますように…。（※12月17日現在）



来年からブリタニアと日本で活動します！

©Kennosuke Sasaki